

## 領域「人間関係」について



領域「人間関係」に関する事例を、三つの「ねらい」からまとめ、紹介します。

# I 領域「人間関係」の考え方

## 1 人との関わりに関する領域「人間関係」とは

この領域は「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」ことをねらいとしている。

人と関わる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる。

幼稚園生活においては、何よりも教師との信頼関係を築くことが必要であり、それを基盤としながら様々なことを自分の力で行う充実感や満足感を味わうようにすることが大切である。

また、幼児は、幼稚園生活において多くの他の幼児や教師と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤等を通して互いに理解し合う体験や、考えを出し合っただけでよりよいものになるよう工夫したり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねたりしながら関わりを深め、共感や思いやり等をもつようになる。

さらに、このような生活の中で、よいことや悪いことに気付き、考えながら行動したり、きまりの大切さに気付き、守ろうとしたりするなど、生活のために必要な習慣や態度を身に付けていくことが、人と関わる力を育てることになる。

## 2 「人間関係」の領域で育てたい幼児の姿

幼児は、友達と関わる中で、様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しい等の多様な感情体験を味わい、友達との関わりを深めていく。その中で互いの思いや考え等を共有し、次第に共通の目的をもつようになる。5歳児の後半には、その目的の実現に向けて、考えたことを相手に分かるように伝えながら、工夫したり、協力したりし、充実感をもって幼児同士でやり遂げるようになる。さらに、他の幼児と一緒に活動する中で、それぞれの持ち味が発揮され、互いのよさを認め合う関係ができてくるのが大切である。

教師は、幼児たちの願いや考えを受け止め、共通の目的の実現のために必要なことや、困難が生じそうな状況等を想定しつつ、幼児同士で試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程を丁寧に捉え、一人一人の自己発揮や友達との関わり状況に応じて、適時に援助することが求められる。相手を意識しながら活動していても、実際にはうまくいかない場面において、幼児は、援助する教師の姿勢や言葉かけ等を通して、相手のよさに気付いたり、協同して活動することの大切さを学んだりしていく。

## 3 人と関わる力を養うために

### (1) 試行錯誤しながら諦めずにやり遂げられるようにする

幼児が試行錯誤しながら諦めずにやり遂げるためには、教師と一人一人の幼児との間に信頼関係をつくり出し、同時に、幼児の言動や表情から、その幼児が今何を感じているのか、何を実現したいと思っているのかを受け止め、自分の力で課題を乗り越えられるようにしていくことが必要である。このような援助をするには、教師は幼児と向き合い、幼児が時間を掛けてゆっくりとその幼児なりの速さで心を解きほぐし、自分で自分を変えていく姿を温かく見守るというカウンセリングマインドをもった接

し方が大切である。

**(2) 自己を発揮し、自信をもって行動できるようにする**

幼児は、周囲の人々に温かく見守られ、ありのままの姿を認められている場の中で、自分らしい動き方ができるようになり、自己を発揮するようになる。教師の重要な役割の一つは、教師と幼児一人一人との信頼関係を基盤に、さらに、幼児同士の心のつながりのある温かい集団を育てることにある。幼児が集団の中で自信をもって行動できるようになるためには、一人一人が集団の中で認められ、そのよさや特徴が生かされる学級集団の在り方を考えることが必要である。

**(3) 試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにする**

幼児は、教師や他の幼児との関わりの中で自発性を獲得し、この自発性を基盤として、より生き生きとした深みのある人間関係を繰り広げていく。その中で、集団の中のコミュニケーションを通じて共通の目的が生まれてくる過程や、幼児が試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程、いざこざ等の葛藤体験を乗り越えていく過程を大切に受け止めていくことが重要である。

**(4) 他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにする**

幼児は、他の幼児と関わりながら生活する中で、生活に必要な行動の仕方を身に付け、また、友達と楽しく過ごすためには、守らなければならないことがあることに気付いていく。それに加え、教師はときには、善悪を直接的に示したり、また、集団生活のきまりに従うように促したりすることも必要になる。さらに、他者とのやり取りの中で幼児が自他の行動の意味を理解し、何がよくて何が悪かったのか考えることができるように、それまで気付かなかったことに気付くように働き掛け、援助していくことが重要である。

**(5) 集団生活を通して、自分の気持ちを調整する力が育つようにする**

幼児は、幼稚園生活では自分の欲求を無理に通してきまりを守らなかったために、友達との遊びが壊れてしまったり、仲間関係がくずれてしまったりすることを体験するだろう。しかし、こうした体験を通して、幼児は、次第に自分の気持ちを調整することの必要性を理解していくようになる。幼児が自分の気持ちを調整しつつ周囲との関係をつくることができるようになる中で、次第に自分の思いを大切にしながら、きまりを守ることができるように、教師は適切な援助をする必要がある。

**(6) 地域の人々等への親しみや、家族を大切にしようとする気持ちが育つようにする**

幼児は、幼稚園生活において、高齢者をはじめ、異年齢の子供や働く人等の地域の人々で自分の生活と関係が深い人と触れ合ったり、交流したりすることは、人と関わる力を育てる上で重要である。相手に喜ばれ、よくやってくれたと感謝されることによって、幼児は自分が有用な人間であることを自覚し、もっと人の役に立ついろいろなことができるようになると思うようになっていく。親や祖父母等の家族のことを話題にしたり、その気持ちを考えたりする機会を設け、幼児が、家族の愛情に気付き、おのずとその家族を大切にしようとする気持ちをもつように働き掛けることも必要である。

《参考文献》 「幼稚園教育要領解説」 平成 30 年 3 月 文部科学省

## Ⅱ 日常の実践事例

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

### 【ねらい】

(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。

(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。

(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

### 【内容】

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中でできまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

## 1 ねらい(1)について

### (事例1) 3歳児「Bちゃんと遊んで楽しいな」

#### — 踊りを通して、友達との関わりが増えていった事例 —

4月に入園し友達との関わりが少なく、一人遊びや友達の遊びを傍観して楽しんでいることが多かったA児が、運動会でB児と隣同士で怪獣ダンスを踊ることになった。「Aちゃん、こっちに並ぶんだよ」とB児に声を掛けてもらったり、一緒に怪獣になって「ガオー」と声を出しながら踊ったりしていた。踊りの大好きなA児は、踊りを通してB児に親しみをもったようで、「楽しかったね」と話し、笑顔もたくさん見られるようになった。その頃から遊びの中でB児からの誘いも多くなった。B児がごちそうづくりの活動で、盛りつけ方を工夫しながら遊んでいる様子を見て、「Bちゃん見て。私のつくったホットケーキ」と自分なりに盛り付けをした皿を差し出し、会話のやりとりを楽しむ様子がみられた。さらに、A児はいろいろな友達の遊びに興味をもち始め、「Aもまぜて」と友達と一緒に遊びを楽しむようになった。

園生活にまだまだ不安な姿をみせることが多かったA児だったが、運動会での怪獣ダンスをB児と隣で踊ることになり、並ぶ場所や移動する場所を教えてもらったり、一緒に踊ったりする姿がみられた。A児は踊りを通して安心し楽しく活動する中で、B児との距離が近付いたと考える。A児は、この活動でB児と一緒に遊ぶ楽しさを味わったことがきっかけで、友達との関係に興味をもち始め、いろいろな友達に自分から関わろうとするようになったと思われる。

### (事例2) 3歳児「僕、できるようになったよ」

#### — 友達や教師が認めてくれたことをきっかけに、自信が付いた事例 —

トイレが終わり蛇口をひねって手を洗う幼児たちの中で、A児は、涙を流して「(蛇口をひねることが)できないんだよ」と訴えていた。「一緒にやってみよう」と手を添えて援助するが、A児は蛇口を開けようとする様子がない。その様子を見ていたB児が「こうやるんだよ」と優しく手本を示すが、やろうとしない。その後も教師はA児が蛇口を回しやすいように、緩めにしておくなどの援助を試みていた。ある日、手を洗いに行ったA児は「できないよ」とまた泣き出してしまった。周りの友達が、「Aくん、がんばって。できるよ」と応援し見守っている。A児はみんなの言葉に励まされ、泣きながらも自分でやってみると、一人で蛇口を回し開けることができた。B児は「すごい。Aくん、自分でできたね」と言い、近くで見ていた友達も拍手をして喜んだ。A児は「やった。僕できた」と笑顔を見せる。その後、「先生、見てて」と蛇口を自分で開ける姿をみせてくれ「自分でできたね。Aくん」と言うと、「うん。僕一人でできるようになったよ」と嬉しそうに言った。その後、少しずつ衣服の着脱なども自分でしてみようとする姿がみられるようになった。

日頃からいろいろなことを不安に感じるA児は、蛇口を回すことにも苦手意識を感じ、前向きに取り組むことが難しかった。しかし、教師や友達が寄り添いながら関わったり、できたことをたくさんの友達が受け止め認めてくれたりしたことでA児は自信が付き、少しずつ自分でやろうという気持ちが育ってきたと思われる。

(事例3) 4歳児「今日も海賊を倒すぞ」

— 友達と関わる必要感とやり遂げた充実感を味わえるように  
援助した事例 —

A児は広告紙に海賊やドクロを描いた的を廊下の梁に貼り、数人で玉を当て落とす遊びをしていた。しかし、途中で一人になったため、教師に「敵倒せんから、手伝ってほしいよ」と言いに来た。そこで、教師は友達に呼び掛けることを提案すると、A児は皆に「海賊倒せんから手伝って」と呼び掛けた。多くの子供が集まって次々に的に玉を投げるが下に落ちない。B児が「こいつめっちゃ強い」と言うと、C児は玉を三つ持って投げ始め、他の子供も複数の玉を持って投げる。それでもなかなか落ちないので、教師は小さく厚い的を少し横にずらし、新たに大きくて柔らかい的を貼った。子供たちの玉がその的に当たり破れて下に落ちると、友達全員で「やったあ、ばんざーい」と喜び合った。その後、年長児が「僕たちにまかせて」と小さく厚い的に玉を投げ、下に落とした。それを見てA児は「すごいね」と言った。

5月下旬、A児は転入園児でまだ親しい友達はいなかったが、なかなか敵を倒せなかったことから、初めてクラスの友達に声を掛けた。その声に応じて多くの友達が集まり、一緒に的当ての遊びを楽しむことができた。

的が破れる瞬間が盛り上がるため、子供たちには「あとちょっとで倒せる」ということが「やってみたい」という意欲につながったと思われる。的の紙の大きさや硬さ、テープの貼り方や貼る場所等、教師は子供たちが楽しめる素材や環境を見極める必要がある。

年長児には、小さく厚い的を落とす挑戦は夢中になるものだった。それは年中児にとって、投げ方の手本となったり年長児への憧れを感じたりするよい刺激となったと思われる。

(事例4) 4歳児「お城をつくろう」

— 友達と共通の目的をもち、一緒に取り組んだ事例 —

クラスで各家庭から集まった段ボールで何をつくるか相談すると、様々な意見が出た中で、「お城がいい」と決まった。お城づくりに向けて子供たちから「2階があるよ」「階段をつくりたい」「旗も付いているよ」など、アイデアがどんどん出てきた。その後、段ボールで城壁をつくっていく子供たちと、「ここ、お風呂」「テーブルもあるよ」「トイレもつくろう」と城内の細かいところをつくっていく子供たちに分かれて活動が繰り広げられた。城の出入り口の扉ができ上がると、女児2人がレンガのような模様を描き出した。また、つくる中でお姫様やゲーム中のキャラクターになりきって遊ぶ子供たちもいた。

子供が、城をつくるという共通の目的をもち、教師が子供一人一人の自由な発想を肯定的に受け入れたことで、それぞれの活動を楽しむことができたと思われる。また、建物をイメージした後、子供たちは自分の家にある風呂やテーブル等を思い浮かべながら、お城づくりについて意欲的に考え、活動に取り組むことができた。

(事例5) 5歳児「虹を描いたよ」

— 友達や教師の言葉掛けで、活動への満足感を高めた事例 —

夏休み前に宿泊保育に出かけ、自然の中で様々な体験をして、友達と一緒に一晩を過ごした。2日目は宿泊保育の思い出に手づくりのペンダントをつくった。A児は、絵を描く活動ではなかなか自分の思いを表現できず、教師の言葉掛けを待っていることが多い子供である。この日は木片にカラーペンで思い思いに絵を描く活動に取り組んだ。A児は自分から花や虹を描き始め、「虹描いたよ」と教師に見せてきた。「かわいく描けたね」と言葉を掛けると、隣にいたB児にも「一緒に虹描こうか」「上手だね」と声を掛ける姿がみられた。その後、絵を描いた木片にひもを通してペンダントに仕上げ、友達とうれしそうに見せ合っていた。

宿泊保育という普段とは違う環境の中で、A児自身も様々な体験を通し、自分のことを自分ですること、少しずつ自分に自信をもつことができたことや、木片という素材に興味をもち、自分で描いてみたいという思いからイメージが広がったことから、自ら描き始めたと思われる。また、教師の言葉掛けや友達との会話が、A児の本活動の満足感を高めたのではないかと考える。

(事例6) 5歳児「僕がつくったおかしだよ」

— 自分たちで小道具をつくり生活発表会の劇に取り組んだ事例 —

11月の生活発表会に向け、10月初め頃から話し合いを進めてきた。昆虫好きな5歳児は、「ありときりぎりす」の劇をすることになり、自分たちで配役を決め台詞を練習してきた。普段から自分の思いを優先させ、友達と一緒に活動することが苦手なA児は、練習中でも出番がないときにはフラフラと歩きまわることがあった。恥ずかしがって台詞が言えないこともあったので、教師はその都度言葉を掛けて励ましてきた。また、練習と並行して劇で使う木や食べ物等の小道具を自分たちでつくる活動を取り入れたり、必要な役割を子供に分担したりした。A児には劇中の役の他に、舞台の後ろの幕を閉じる役割を任せた。すると、A児は毎日張り切ってその仕事に取り組み、「次、Bくんの番だよ」と声を掛けたり、「僕の出番だね」と話したりし、劇の練習に意欲的に参加できるようになってきた。

A児は、生活発表会の劇づくりの中で、小道具をつくったり、決められた自分の役割に取り組んだりすることで、次第に意欲的に練習に参加できるようになった。自分がつくった物は自分の物というこだわりが強く、友達に譲れない場面もみられたが、A児にとって、友達と同じ目標をもって活動する体験が、自分の役割を果たす喜びや満足感に結び付いたのではないかと考える。

## 2 ねらい(2)について

### (事例1) 4歳児「僕だってできるよ」

#### — 3人で工夫したり協力したりして、ビー玉遊びを楽しんだ事例 —

A児が立体迷路積み木で遊んでいると、B児がやって来て加わる。A児は、B児が積み木を移動させたのを見て、コースを壊されたと感じ、一方、B児は、A児がビー玉を貸してくれないと感じ、けんかになるなど一緒に仲良く遊ぶことができなかった。教師は、A児とB児の双方に、相手の気持ちに気付くように話をしたり、一緒にコースづくりに参加して「ここは坂道にしたらどうかなあ」と言葉掛けをしたりして、声を掛け合って協力してつくる体験や一緒に遊ぶ機会を増やすようにしていった。

その後、A児とC児と一緒にコースをつくって遊んでいた。そこにB児が来て「僕もできるよ」と加わった。C児が「ここを高くしたらいいんじゃないかな」と自分の考えを伝えていた。コースは次第にでき上がり、3人で嬉しそうに笑った。でき上がったコースに早速ビー玉を転がしてみると、引っ掛かるころがあった。3人で相談しながら改善していくと、いつもより大きなコースができた。「よーし。転がすぞ」とビー玉を転がし始めると、友達も集まってきて、一緒に遊びを楽しむ姿がみられた。

A児とB児は、立体迷路積み木で遊びたいという気持ちは同じだが、それぞれに思い描く遊び方が違い、それを相手に上手く伝えられないことで、ますますトラブルが多くなっていた。教師はA児とB児の遊びに加わり、自分の思いだけではなく、相手の気持ちにも気付くことができるような言葉掛けで支援した。断定ではなく、やさしく提案するC児の関わり方は、A児とB児に快く受け入れられ、2人の手本となった。3人は協力して立体迷路のコースを考えてつくったり、ビー玉を転がして仲良く遊んだりしていた。この遊びを通して、協力してつくることや一緒に遊ぶことの楽しさを実感することができた。

### (事例2) 4歳児「いやだよ。僕、使っているのに」

#### — 自分の思いを出せるようになってきた事例 —

A児は遊びの中で、自分の使っている玩具を横から黙って取っていかれても何も言えず、泣くことが多かった。その度に「Aちゃん、Bくんがブロック取られたんだって」と友達が知らせてくれた。教師は、A児の気持ちを受け止めたり、A児にB児の気持ちを代弁したりしながら、友達に自分の気持ちを伝えられるように励ましてきた。その後、A児は困った事があると少しずつ教師に伝えるようになった。今度は友達に自分の気持ちを話してみることを薦めた。

数か月後、A児がブロックで飛行機をつくっていると、いつものようにB児に横から玩具を取られた。その時「いやだよ。僕、使っているのに」と言った。言った後、A児はハッと顔色を変え教師の表情を窺った。教師が「Aちゃん、すごいね。お友達にお話できたね」と言うとA児は満面の笑みを浮かべた。B児はびっくりして、ブロックをすぐにA児に返した。A児は、B児の気持ちに気付いた様子で、ブロックをB児に少し分けて一緒に遊んだ。

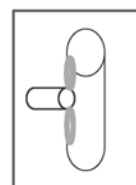
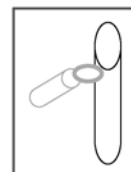
教師がA児に自分の気持ちを相手に伝えることの大切さについて話し、A児を支えることで少しずつ自分の気持ちを相手に伝えることができるようになった。自信がついてくると、友達との関わりも少しずつ変わってきた。自分の気持ちを伝えることについて、「言えた」とプラスに捉えているA児の様子がみられた。さらに「B児もブロックが使いたいのかな。少し貸してあげよう」と相手の気持ちを考えた関わりもみられるようになった。



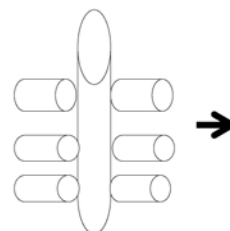
### (事例3) 5歳児「本当の骨みたいになりたい」

#### ー 試したり工夫したりしながら、友達と力を合わせて ガイコツの製作をした事例 ー

子供たちは、お化け屋敷をつくって遊ぶ準備をしていた。A児とB児は、ガイコツをつくる相談をし、トイレットペーパーの芯と長いラップの芯を材料に選んだ。A児とB児は、ガイコツの胸骨と肋骨をラップの芯とトイレットペーパーの芯を使ってどのように付けたらよいかを話し合い、輪ゴムで付けることにした。教師が「輪ゴムでどうやって付けるの」と聞くとA児が「テープでとめてみる」と言った。B児も「そうだね、テープにしよう」とビニールテープを取ってきた。トイレットペーパーの芯の端に輪ゴムを一つ貼り、ラップの芯にビニールテープでとめたが、芯が下がってしまい、二人がイメージする肋骨にならなかった。A児は「本当の骨みたいになりたい」「ラップの芯は縦にして、トイレットペーパーの芯は横にしてとめたいな」と言うので、教師も一緒に輪ゴムをラップの芯に巻いたり、引っ掛けたりしながら試した。「輪ゴムが大きいのかな」とB児がつぶやいた。教師が、輪ゴムにはいくつかの大きさのものがあつことを知らせ、園にあった別の輪ゴムを材料に使うことになった。二人は輪ゴムを伸ばして貼ったり、輪ゴムの数を増やしたりしながら試行錯誤した。「輪ゴムを横に付けるんじゃないかと、上と下で引っ張って付けたらいいんじゃないかな」とA児が考えを伝えると「やってみよう」とB児が付け始めた。「輪ゴムを上と下に伸ばして貼ったらトイレットペーパーの芯が横になるね」とB児は、次々につなげていき、二人がイメージしていた肋骨がつくれたと喜んだ。



次の日、ビニールテープが取れているのを見た二人は相談して、布ガムテープで付け直し始めた。A児が「テープ切るね」と切り始めると、B児は「テープで留めるね」と役割を分担し、「ここ難しいから手伝って」と声を掛けながら作業を進め、ガイコツを完成させた。



子供がやりたいことを実現できるよう、教師が遊びに必要な材料を子供と相談しながら準備したり援助したりしたことが、粘り強く試行錯誤する姿につながったと思われる。

B児は、A児の考えや思いを聞きながら製作を進めていたがうまくいかず、「輪ゴムが大きいのかな」とつぶやいた。それを教師が捉え、輪ゴムの種類を知らせたことが、粘り強く製作し、新しい方法を考えつくことにつながった。ガイコツの製作を通して二人は、自分の思いや考えを伝え合い、何度も試しながら友達と一緒に遊びを進める楽しさや共通の目的を実現する喜びを味わうことができたと思われる。

教師は、子供が活動を楽しんでいる姿や新しいアイデア、困ったことを話し合い、試したり工夫したりしている姿を見守りながら、タイミングを見極めて関わる大切だと考える。また、自分たちで試行錯誤しながら力を合わせて問題を解決できるように子供の主体性や関わり合いに配慮して援助することが必要である。

(事例4) 5歳児「お化け屋敷をやりたい」

ー 自分の思いを出し合い、工夫したり、協力したりして遊びを展開した事例 ー

ハロウィンが近付いてきた時期に、「お化け屋敷をやりたい」という声が子供たちから発せられた。一人一人が思いを出し合い、クラス全体でお化け屋敷づくりが始まった。

お化けトンネルやお墓、コスチュームをつくって、お化け屋敷を完成させた。子供たちから「小さい子呼んで驚かせよう」と声が上がったが、教師は「小さい子呼ぶ前に、みんなでどんなふうに驚かすかやってみたらどう」と投げ掛けた。子供たちは「そうだね。やってみよう」とそれぞれ隠れ場所を決めていった。しかし、A児は隠れる場所を見付けられないでいたので、教師が「Aちゃん、どこに隠れるの」と聞くと、首をかしげて周りを見渡した。B児が「Aちゃんはミイラだから、お墓の後ろに隠れたらいいよ」と教え、教師は「いい考えだね」と受け止め、A児も「うん」と言って、墓の後ろに隠れた。C児が「先生、小さい子になったふりして入ってみて」と声を掛けてきたので、教師は「分かったよ。やってみるね」と言って試すことにした。

「暗くて、怖いな」と、教師が入って行くと、「うおー」と一斉に隠れていたお化けが出てきて、教師を捕まえた。C児が「先生、どうだった」と聞くので、教師は「大きな声に驚いて、捕まえられて動けなくなって、お化けもよく見えなかったよ」と伝えた。すると、「順番を決めて、驚かせたらどうかな」と話し合い、再度それぞれの場所に隠れた。

教師が入口から入ると、順番にお化けたちが登場した。C児が大きな声で登場すると、B児は「そんな大きな声を出したら、みんなの声が聞こえないよ」、D児は「大きな声ってお化けらしくない」と言い、C児は困った顔をした。そこで、「お化けの声ってどんな声かな」と投げ掛けると、B児は「ゆうー」と低く小さな声を出し、E児も「そうだよ。ゆうー、だよね」と同じように声を出した。するとC児が「やってみる。ゆうー。こんな感じかな」と声を出してみると、D児が「そうそう、いいね。そんな感じ」と返し、C児は嬉しそうな顔をした。

お化け屋敷づくりを行っている間は、どの子供もそれぞれのイメージで環境や衣装をつくることを楽しんでいた。しかし、お化け屋敷ができ上がり、そこに「小さい子呼ぼう」と子供の気持ちが同じ方向に向かったときに、教師が「どんなふうに驚かせるかをやってみよう」と提案したり、「大きな声で驚いた」と感想を伝えたりと、自分を振り返ることができるような言葉掛けをした。それをきっかけに子供たちはイメージを出し合い、どうしたらもっと楽しくなるか考えることができた。

A児やC児のように一人ではうまく解決できない問題に直面して困ったときに、友達と力を合わせ、関わりを深める中で困難を克服したり、クラス全体の遊びに対する意欲を高めたりすることができたと考える。教師は子供同士でアイデアを出し合ったり、相手の思いを受け入れたりすることができるような援助を工夫することが大切である。

### 3 ねらい(3)について

#### (事例1) 2歳児「一人でも、できるよ」

##### — 教師が見守ることで必要な習慣を身に付けていった事例 —

毎日のおやつや食事の前に、手洗いを呼び掛けている。入園当初は家族と離れ、新しい生活環境での生活となり、水道の蛇口をひねることやハンドソープを手で押して出すことができない子供もいた。たくさんの水を出すことがだんだんと楽しくなって水遊びをする姿や、ハンドソープを何度も押すことで手のひらを泡でいっぱいにして、その感触を楽しむ姿もみられた。教師が「お水がいっぱい出ているね、ちょっとたくさんすぎるかなあ」と声を掛けたところ、子供たちは、「お水いっぱい出しているの。いっぱいになったよ」と嬉しそうに話したり、「泡いっぱい。フワフワしているよ」と友達と笑い合いながら楽しんだりしていた。

水やハンドソープで遊んでいる際に、並んで順番を待っている友達に水がかかったり、手洗いに時間がかかったりすることがあった。教師は子供の遊びたい、楽しいという気持ちを受け止めながら、手洗いの仕方や友達の気持ちを伝えることで、少しずつ手洗いがスムーズにできるようになったり、友達の気持ちを理解しようとしたりする姿がみられるようになった。

子供たちの姿から、手洗いをするという意識よりも、水に触れることが楽しいと感じていることが理解できた。遊んでいる姿をその場で否定するのではなく、「お水がいっぱい出てきて楽しいね」「暑くなったらお外で水遊びできるね」など、じっくりと気持ちを受け止めながら、教師が手本となって手洗いを実演したり、手洗いの必要性について紙芝居で知らせたりするなど、子供たちが理解しやすいように工夫することを心掛けた。

また、水量の加減については、どれくらいがちょうどよいのかを分かりやすく伝えるため、「透明なお水、出せるかな」「白い(勢いよく出ている様子)お水だと、出すぎちゃうから気を付けてね」と子供たちに水を出す様子を見せることで、少しずつ自分で水量を調節できるようになった。「先生、今日は白いお水じゃなかったよ」と嬉しそうに教師に伝えたときには、そのがんばりを認めることで、少しずつ自信をもてるようになっていった。

また、後ろに並んでいるB児に水がかかってしまったときには、A児に友達の気持ちに気付かせるために、「Bちゃん、お水がかかってびっくりしたみたい、冷たかったのかもね」と話し掛けた。A児は「ごめんね」とB児に伝えていた。

2歳児のクラスには途中入園の子供やプレ入園で週に2回登園する子供等、様々な子供が在籍しているので、新しく入園した友達に、「ハンドソープは1回だけ押すんだよ」「〇〇ちゃん、後ろに並ぼう」と教える姿がみられた。教師は、子供の姿や気持ちを捉えて言葉を掛けたり、時には見守りながら必要な援助を行ったりすることが、自分たちできまりを守ろうとする気持ちをもたせる上で大切であると感じた。

(事例2) 2歳児「痛いの 痛いの 飛んでいけ」

— 物を大切にしようという気持ちや友達への思いが芽生え始めた事例 —

保育室でA児は、ままごとの皿を投げ、自分で拾ってはまた投げるとい遊びを繰り返していた。教師は「投げたらだめ。危ないよ。大切に使ってね」と話し、皿を渡した。すると、A児は皿をゆっくりと床に置き、その上に乗った。教師が「あ〜っ、お皿さんかわいそう」と言うと、周りにいた子供たちが集まってきた。B児とC児も一緒に「あ〜っ」と言い出したので、A児はすぐに皿を拾い、教師に渡した。教師はA児に「お皿さん、どうしたらいいの」と尋ねると、「痛いの 痛いの 飛んでいけ〜」と、泣きそうな顔をしながら皿をなでて言った。そのA児を見て、B児とC児は笑顔になり、「痛いの 痛いの 飛んでいけ〜」と一緒に皿をなでながら言い出した。教師が「お皿さん、痛いの 飛んでいったね」とA児に言うと、嬉しそうに返事をした。「大切に使ってね」と、もう一度言って皿を渡すと、A児は皿を胸に抱きしめた。その様子を近くで見ていたD児がA児の頭をなでた。

A児は途中入園で園に来たばかりである。友達を押ししたり、おもちゃを取ってしまったりしたことがあったからか、他の子供がA児に関わろうとすることが少なく、友達と一緒に遊ぶことがなかった。また、教師がA児と遊ぼうとすると本人が嫌がったため、他の子供と関わりながらA児の様子を見守ることにした。

ある日、A児が給食の準備中に皿を落としたので、拾って渡したが、自分で拾いかけたA児はその皿を投げた。自分の思いを言葉でうまく伝えることができないため、今回の事例で皿を投げたことも、友達の興味を自分に向けるための行動かもしれないと考えた。

また、皿の上に乗った後、教師だけでなくB児とC児にも「あ〜っ」と言われたことで、A児は「いけないことをしてしまった」と感じてあわててお皿を教師に渡したと思われる。A児は、子供たちがぶつかったり転んだりして泣いているときに、教師が「痛いの 痛いの 飛んでいけ」と言っていたのを思い出し、「痛いの 痛いの 飛んでいけ〜」と言いながら皿をなでたのであろう。また、教師が「できたね。上手」と、A児の頭をなでているのを見て、D児も「痛いの 痛いの 飛んでいけ」と言えたA児を褒めてあげたくてA児の頭をなでたのだと思われる。A児は教師だけではなく、友達との関わりの中で、物を大切に扱うことの大切さに気付くことができたと考える。

「一緒に遊ぼう」「貸して」「上手」など、自分の思いを動作だけではなく、言葉で相手に伝えられるように声を掛けていくことも大切である。

(事例3) 3歳児「年中さんがつくったおもちゃ、楽しいね」

— 順番を守って遊ぶことの楽しさを実感した事例 —

12月に、「どんぐりのおもちゃができたから遊びに来てね」と年中児が年少組へ誘いに来た。喜んだ年少児は、にこにこしながら年中児と手をつないで、年中児のクラスへ歩いて行った。部屋には、いろいろなコーナーがあり、年少児たちは自分の行きたいところへ行って遊び始めた。

どのコーナーにも多くの子供たちがいたが、順番を守って自分の番が来るまで静かに待って遊んでいた。子供たちは、年中児がつくったおもちゃでたくさん遊び、どの子供もおもちゃを丁寧に使い、遊び終わると元の場所へそっと置いていた。遊び終わると、「ありがとうございました」と年中児に伝えたり、「また来たいな」とつぶやいたりして、楽しそうに部屋へ戻っていった。

年少児は、入園以来、1列に並ぶことや順番を待つことを繰り返し行ってきた。最初は、友達の後ろに並ぶことが分からず、横から前を覗き込むため、なかなか1列にならなかった。また、やりたいことや気になることがあると並んでいても前に出てきたり、動いてしまったりして順番に待つことが難しかった。そこで、遊びの中で順番に行うものを多く取り入れた。まず、自分の番が来るということを感じられるよう、椅子を並べて前の人がいなくなったら、詰めて前の席に座っていくというやり方を取り入れた。その中で、子供たちは並んで順番に行うことで気持ちよく遊べるということを感じていったようである。それができるようになると、1列で廊下や園庭を歩いたり、来た人から並んだりする遊びを徐々に増やしていった。



今回のどんぐりおもちゃでの遊びは、年中児と初めて交流した遊びである。初めて行く場所で、楽しい遊び道具がたくさんあっても、子供たちはけんかをする事なく、順番に並んで自分の番が来るのを待っていた。また、年中組の友達のつくったものを大事に使おうとする姿もみられた。

きまりを守り、よいことやしてはいけないことを考えて行動し、楽しく遊ぼうとする姿は、日頃の保育の積み重ねを踏まえた姿であり、子供たちの成長を感じた。



(事例4) 5歳児「僕も一緒に遊びたかった」

— 自分の思いを相手に伝え、相手の思いに気付く事例 —

5人の子供がレンガ積み木で、ドミノをつくり、「どんなコースにする」「階段みたいにして並べていこう」などと話をしながら、長さの違う積み木をどんどん並べて遊んでいた。ドミノが完成し、みんなで「よし。倒そう」となったとき、それまで他の遊びをしていたA児が突然やってきて、ドミノを倒してしまった。それを見た5人の子供は、「なんで倒すの」「僕たちがつくったのに」「自分たちで倒したかった…」などと口々に言い、A児に怒りをぶつけた。倒したときは嬉しそうにしていたA児だったが、みんなの怒っている様子を見て、反省した表情になっていき、倒したドミノを黙って直し始めた。しばらく涙ぐんでいたが、『ごめんね』しないとだめだよ』と5人から言われ、「ごめんね。だって僕も一緒にドミノを倒したかったもん」と泣きながら訴えた。それを聞いた5人は顔を見合わせ、「じゃあ仲間に入れてあげる。一緒に遊ぼう」と誘い、その後、みんなで楽しそうにドミノ遊びを続けた。

5人がドミノを並べている様子を遠くから見ていたA児は、悪気なく「ドミノを倒したい」という気持ちで倒してしまっただろう。しかし、一生懸命つくり上げたドミノを一瞬で倒されたことで、積み木を並べていた5人には、怒りや悲しみの気持ちがわき上がってきたのであろう。A児が相手の気持ちを考えずにドミノを倒してしまっただことがトラブルの原因となった。このときは、子供同士が互いの気持ちを伝え合う姿がみられたので、教師が間に入って直接指導や提案をすることはなく、見守った。A児は最後には仲間に入れてもらい、一緒にドミノを完成させ、遊ぶことができた。

子供たちにとっては、友達とのやり取りの中で、自分の行動の善し悪しを相手の立場に立って考え、どうしたら友達と楽しく遊ぶことができるのかを考えるよい機会になったと考える。そして、友達と遊ぶ楽しさや充実感を味わう中で、友達と遊ぶ中にもルールがあること、それを守ることの大切さに気付くことができたと考える。

トラブルが起きたとき、教師は、自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いを知ったりできるように、見守ったり、助言をしたりするなどの援助を工夫していくことが大切である。

